
松原陽佑の仕事

うどん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

松原陽佑の仕事

【Nコード】

N3240P

【作者名】

うどん

【あらすじ】

松原陽佑の仕事シリーズです。

おそらくファンタジーになると思います。

登場人物はやる気のない男性と一回死んだ少女。

二人は何かの縁によって引き寄せられます。

無気力で自堕落で将来に対して希望も夢もなく自分の事を空っぽだ
と思っっている若い主人公。

何をやるべきか、何がやりたいのか、自由だからこそツライ悩みつ

て言うのがきつとあるだと思います。

俺の生い立ち

俺は人口60億人いると言われる地球の中でもとりわけ空っぽな人間だと言っ事を自負している。

「馬鹿言ってんじゃねえ！そんなわけあるか！俺の方が何もねえ！」
っと思う奴もいるだろうが安心しろ、絶対俺の方が無い。

小さい頃からピアノだテニスだスイミングだと習って来たが身になった形跡がない。

全部途中で飽きて放り出したのだ。

小学生の時は面白くもねー習いごとに日々追われる毎日だった。

中学生になっってから全部やめて、とりあえず入った陸上部も面白くねーから1日でやめた。

もちろん、こんな中途半端なやつが勉強もできるわけでもなく成績はいつも中の下。

高校受験の時に担任に

「公立はまず無理だと思っの方がよいでしょう」

と三面で言われおかんが泣き崩れた。

「うちに私立行かせる金があると思ってんのか！公立に落ちたら家出てってもらうからな！」

とおかんからの強ひ…叱咤激励もあり、俺は勉強した。

そして何とか地元の公立^{バカ}高校に入学できた。マジ奇跡だった。

入学したらしたで最初の定期テストで赤を取った。

その後の三面で担任に

「このままいったら留年か退学でしょう」

と言われおかんが泣き崩れた。

「うちに留年させる金があると思ってんのか！ダブったらそのチャラチャラした髪の毛刈って炭鉱に送りつけるからな！」

とおかんからの強ひ…叱咤激励もあり、俺はまた勉強した。

そして何とか次の定期試験で平均以上をとり、留年の危機は免れた。マジ奇跡だった。

その後の俺はこの時ではないにせよそこそこ勉強するようになった。

流石に同じ轍を3度も踏むような真似はしないさ。

地域でもバカ校で通っているだけあって、俺くらいの頭でも常に中

の上になる事が出来た。

最初のうちはそれが嬉しくて結構勉強したんだぜ？

でも途中で俺がどんなに頑張ってもトップになる事は出来ないと悟って『そこそこ』の勉強しかしなくなった。

なぜ諦めたかって？

自分の身の丈に合わないハイレベル高校に挑んだ結果、無残に散って行き場の無くなった頭のいい奴らが定員割れしていたこの学校に入学していた事に気付いたからさ。

どんなに頑張っても俺はこいつらに敵いつこない。そう気づいたんだ。

まったくもうちょっと頑張ってくれよ、お前らならもつと上にいけるだろ、そう思った。思った所でしようがないとも思った。

それから俺は密かに目指していた「学年主席」の夢も諦めた。

そして退学にならない程度の「遊び」に手を出し始めた。

まあ最初の頃は夜中にダチとつるんでゲーセン行ったりするくらいだったさ。

だけど2年くらいになると喧嘩したりケンカしたりけんかしたりするようになっていった。

こういう風に言うと「関東1強くなったの?」とか「県制覇とか?」
って思うかもしれないがそう思った奴はマンガの読みすぎだ。

ケンカ、しかも高校生同士の遊びみてーなケンカに「関東1」だの
「県制覇」だのなんてそれなんて運動部?

そんなトップ目指す気力があるなら最初っから陸上部で日本1を目
指す爽やかスポーツ少年にでもなってたっつーの。

つるんでたダチだってそこまで仲が良かったかって言われると疑わ
しい。

ある日急にラーメンが食べたくてダチの一人に電話した事がある。
そしたらそいつなんて言ったと思う?

「俺今ポ モンで忙しいから無理」

だぜ?

「俺はピ チュー以下か」

って言ったら

「今はピ チューじゃねえよ。チ リータだ」

って言われた。うん、ポ モン面白いよな。でもその時の俺は面白
くなかったから電話をぶった切ってやった。

それから俺は何をやっても面白くなかった。

女遊びも経験したしまあアルコールや煙草もちよちよいつてやったことも無きにしも非ずだ。

だけどやっぱり満たされなかった。

俺には何もない。

いつもそう思っていた。

俺より頭いい奴バカなやつ、年上年下、男女：みんなみんな何かしら持っているのに俺だけ何もない気がした。

心には何時も満たされない思いでいっぱいだった。

自分はどこから来た？何をしなければならぬ？何がしたい？何ができる？自分は何者だ？

答えは出なかった。

そんなことで悩んでいるうちに俺は3年になっていた。

おかしい。昨日入学したばかりなのにまた進路に悩む時期がきているぞ？

俺は進路調査票を渡されても何も書けなかった。

自分にはやりたい事も成すべき事も何もない。

しばらく考え、俺は親に勧められた近所の私立^{バカ}大学に奨学金で入る事にした。

学部も一番入りやすい所を選んだ。全然興味のかけらもない学部だった。

そこそこ勉強していたおかげで、推薦も奨学金ももらえる事になった。

早々に進路が決まった俺を周りのやつらは恨めしがったが俺は全然嬉しくなかった。

行きたい大学でもなく学びたい学部でもない。なんてつまらない男なんだ俺は。

そして遊んではかりいた高校3年間はあっという間に過ぎ、俺は大学生になった。

少女との出会い（前書き）

松原陽佑シリーズの2です。だんだんファンタジーって言うか空想っぽくなってきました。大学生になった主人公がある日突然わけのわからない衝動に駆られ霊柩車を追いかける話

少女との出会い

大学に入ってから俺は相変わらずだった。

ケンカこそあまりしなくなったとはいえ、高校時代そこそこ頑張っていた勉強さえ、単位がもらえればいいやと言うような成績、その単位も進級ギリギリだった。

それどころか自分の在籍する学部の正式名称すら曖昧な状態だ。

確か「国際経営文化なんちゃら」って感じだったと思う。

国際なのか経営なのかそれとも文化を調べるのか全く持つて俺には分からない。

毎日学校行って授業受けてバイト行ってたまに男とケンカしてたまに女とケンカするような決まり切った面白みのない大学生活だ。

自分が何者なのか何がしたいのかという答えも出ぬまま時間ばかりが過ぎて行った。

そんなある日、法学だか論理学だかの講義中に窓の外を眺めていた俺の目に一台の霊柩車が走って行くのが目に入った。

その瞬間俺は今までにないような感覚に襲われた。

その霊柩車を全力で追いかけていけないと思った。

何故だかは分からない。

理由も分からず気が付いたら俺は駈け出していた。

この俺がだぜ？

小さい頃から無気力で何にも興味がなくて「嫌いな言葉は『頑張る』です」って卒アルに書いた俺が誰が乗ってるか知らねー霊柩車を追いかけている。

こんな事って信じられるか？

だけどその時の俺は一生懸命だった。

朝、30分かけてセットした髪が崩れるのも気にせず一心不乱に追いかけた。

途中で見失ったけど火葬場なんてめったにあるわけじゃない。俺は迷わずそこから近い火葬場まで走った。

俺が火葬場に着くとそこには複数の霊柩車が止まっていた。

自分が見た霊柩車はそれだろうか。

なぜだか凄い胸騒ぎがした。

そして俺は火葬を止めなければならぬと俺は思った。

しかし、自分が見た車がどれなのか分からなかった。

喪服の人の中で一人だけ普段着な俺はこの上なく目立って人々から氷のような視線を浴びせられたが構っていられなかった。

火葬場の中を親族のふりをしてグルグル回っていると一つの喪服集団が目に入った。

俺はわけも分からず「そこだ！」と思った。

そして無我夢中でその集団の中にわけ入り、「燃やすのやめて下さい！お願いします！中の人まだ生きてるんです！」って叫んでいた。

どうして俺がそう叫んだのかよく分からない。

だけど身体が自然とそう叫んでいたんだ。

棺の中の人の親族であろう人々は俺の事を明らかに不審な目で見ていた。

そりゃそうだろう。

いきなり大切な人との別れの場に汗みずくの得体のしれない男が乱入してきたんだから。

俺だったらキレるね。

それでも俺は叫び続けた。「お願いしますお願いします！中を確認してください」ってね。

そしたら二人の男女が目の前に現れた。

「君は…娘の友達かい？」

棺の中の人は女だつてこの時初めて知った。

目の前にいる男女はその女の両親らしい。

二人の歳からすると棺の中の人は女というより少女と言った方がよさそうな歳だと思った。

俺は無我夢中で「はい、娘さんの友達です！お願いですから中を確認してください！」と叫びまくっていた。しかも土下座付き

土下座なんて生まれて初めての事だった。

両親は俺の鬼気迫る懇願に圧倒されている様子だった。

それでも父親らしき人は「娘は死んだんだ。もう手遅れなんだよ」と言つて立ち去ろうとした。

ああああどうする俺！マジ泣きそうだったね！

すると天の助けか、母親らしき人が手を差し伸べてくれたのさ。

「この子の為にここまでしてくれる人に最期のお別れをさせてあげるくらいいいじゃないですか」

ってね！マジで菩薩に見えたから。菩薩の顔良く分かんないけど。

父親も「まあ、そうだな。それでこの子も納得いくなら……」って言うてくれた。

マジありがとう神様！俺は棺の所まで飛んで行った。

周りの人も多少気になるのか興味半分なのか棺の所に集まってきた。

そしてゆっくりと開けられた。

棺の中にいたのはまだあどけなさの残る少女だった。

その少女が花に囲まれながら横たわっていた。

大きな声をあげ泣きながら。

俺と少女（前書き）

松原陽佑の仕事シリーズです。少女とようやくお話します。この女の子が陽佑にとって重要な人になってゆきます。なんか話がぶっ飛びすぎな気もするが…

俺と少女

その後の事はよく覚えていない。

少女が生きているとわかった瞬間あたりは騒然となった。

ある人は「奇跡だ!」と叫び、またある人は「診断ミスだ!担当医を呼べ!」と叫び、またある人は念仏を唱える始末だ。

少女の母親は気を失いかけ、それを父親が支えていた。

父親もパニックになっているようで、「こんな事が、こんな事が…」と呟いていた。

職員の人が「このままではどうしようもないから一度病院に行ってください。」テキパキと指示をしてくれなければあの場合はパニックに陥ったね。

そして気が付いたら俺は一緒に車に乗せられて病院に向かっていた。

病院に着くと、少女はすぐに精密検査などを受けるために医者に連れて行かれてしまった。

その場に残されたのは俺と両親とその他知らない人。

少女の両親はこれでもかっていうほど俺にお礼を言いまくっていた。

よしてくれって言うてもきかなかった。終いには医者と看護師に止めれる始末だった。

その日はずっと検査の為少女に会えそうもないし、俺がその場においても親族の邪魔になっちゃおうと思ったので帰る事にした。

両親は引き止めたが、また後日見舞いに来るからと言い連絡先を教えて帰って来た。

家に帰り俺はすぐに風呂に入った。

家族に今日の事を話す気にはなれなかった。別に恥ずかしいとかそんなんじゃない。ただ興奮しすぎて話せる状態じゃなかったんだと思う。

何時もはシャワーで済ます俺が、湯船につかりながら今日1日の事を考えた。

あんなに一生懸命に他人の為に何かをやり、懇願し、それを聞き入れられ、結果が上手く言ったのは生まれて初めての事だった。

生まれて初めて味わう、ある種の達成感に俺は興奮していたのだ。

不謹慎だとは思う。しかし感じてしまふのだからしょうがない。

内容が内容なだけに今日の事は一生忘れられないだろう。

しかし、名前も知らないあの少女は一体何なんだろう。

明日病院にお見舞いに行ってみるか、だけど検査とかで会えない可能性の方が高いか。

いつたいなぜなんな事に？

そんな事を考えていたら俺はいつの間にか2時間も風呂に入っていたらしい。

「陽佑えー死んだのおー？」

とあまり心配してなさそうに覗いてきた母親に「縁起でもねえこと言っくなっ！」と叫んで俺はようやく風呂から出た。

次の日の朝、俺が一生懸命髪の毛と格闘している最中に携帯に見知らぬ番号から着信があった。

出てみると、昨日の少女の両親からだった。

検査で、全くどこにも以上が見当たらず健康そのものの数値しか出ないため面会が可能になったので是非見舞いに来てほしいという事であった。

俺は今日の予定を全部自主休講に急遽変更し、昨日行った少女の入院している病院へと向かった。

病院に着くとロビーに父親が座って待っていてくれた。

挨拶もそこそこに、早速病室に向かったのだがその間中質問責め！

本当まいったね。だって俺はあの子の名前すら知らないんだから。

それなのに父親は「娘とはどんな関係なのか」とか「どうして昨日娘が生きてるって分かったんだ」とか聞いてくるんだぜ？本当まいったまいった。

あれほど数分間が長いって思った事はないよ。

ようやく病室についてドアを開けるとそこには昨日棺の中で大泣きしていた少女がベッドの上に座っていた。

そばには母親もいて俺を見るなり目を潤ませて「昨日は本当にありがとう」と手をとって頭を下げた。

いつまでも手を握っている母親に困っていると、ベッドの上から声がした。

「お母さん、もうやめてあげてよ。困ってるじゃない」

少女の声は高く張りがあって、昨日棺の中に入っていたとは思えないくらい元気な声だった。

「お母さんもーしっかりしてよー。お客さんにお茶とか出さなきゃ！」

少女は予想以上に元気な様子であり、俺はちょっと拍子抜けした。

母親は「ああーそうだったわ！ちよっと下の購買で何か買ってくる

から」と言つて財布を持って病室から飛び出して行つた。

少女の父親はその場に残りまだ俺に質問しようとしていたが、少女に「お父さん私ケーキ食べたーい」と言われ「まったくしようがないな。すぐ戻ってくるから松原さんに迷惑かけるんじゃないよ」と言つてケーキを買いに出て行つた。

その場に残つたのは俺と少女のみ。

どうしたものかと俺は考えた。

だつてそうだろ？

少女の両親は俺達の事知り合いだと思つてるけど本当は赤の他人同士なんだぜ？

少女からしたら命の恩人とはいえ、見ず知らずの大学生の俺のことなんて「何このおっさん」程度にしか見られていないに違いない。

何も考えず見舞いに来てしまった己の愚かさを呪いながら黙つていと、少女の方から話しかけてくれた。

「昨日は助けてくれてありがとう。えーと松原…ユウスケ…さんでしたっけ？」

「あ、ああそう。俺は松原佑介。えーっと君の名前は…」

「私の名前は鳴海綾。綾って呼んで下さい。」

「分かった。それじゃあ…初めまして」

「ええ、初めまして」

俺たちは握手をした。

凄く変な気がした。

全てが変…っていうか俺が元凶でもある気がするんだけどまず何よりこの綾って子が俺の事を全く不信がらずに受け入れていること自体が変だ。と思う。

普通は怖がったり「何このおっさんキモイ」とか言ったりするもんだろ？

なんでこんな落ちついていられるんだ？

「君は俺の事をキモ…いや、怪しいとは思わないのか？」

思い切って聞いてみた。黙ってたってしょうがない。

綾は驚いた様に目を開いたがすぐに笑顔に戻って逆に俺に質問した。

「昨日松原さんはなぜ私のことを助けてくれたんですか？」

そうきたか

「なんか…凄く変だと思うんだけど…」
「ああ、行かなくちゃ、この人を助けなきゃ」って思ったんだよ」

「私もですよ」

「え？」

綾は笑顔のままだ

「私も松原さんと同じ『誰かが私をここから助けてくれる』、そう
得体のしれない確信があつたんです」

「……」

「私は待つていたんですよ。松原さんを。棺の中で」

そう言い終わった瞬間、綾の母親が「松原さんってお茶大丈夫ー？」
と言いながら病室に入ってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3240p/>

松原陽佑の仕事

2010年12月6日01時00分発行